

【高等学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	佐賀県立小城高等学校		
1 前年度 評価結果の概要	・2022年度から「進化！小城高校2022始動」を掲げ、今年度は校務分掌の見直しなどの改革に取り組んだ。秋には地域の方々に広く参加者を募集し、音楽会を初めて開催し参加者等から高評価を得ることができたが、教育活動を校内だけで完結しない今後の高校のあり方を体現できた取組であった。 ・生徒の安全安心な学校生活の確保のために、教育相談を充実させ、SCやSSW、外部機関等と連携を取りながら、適切な取組を実践することができた。次年度は、校務分掌の再編することで、更に全職員が一丸となって連携を強化し、多様化する生徒の指導・支援にきめ細やかな対応を推進していく。		
2 SAGASクール・ミッション 学校教育目標	○SDGsに基づいた課題を探究する「オンリーワン活動」を展開し、自己有用感を備えた、新たな価値の創造と平和で幸福な社会の実現に取り組む人材を育成する。 ○多様で開かれたインクルーシブ教育を推進し、次世代の共生社会を担う人材を育成する。		
3 スクール・ポリシー	アドミッション・ポリシー ・ふるさと佐賀を誇りに思い、将来は自分の住んでいる地域のために貢献したいという高い志を持つ生徒で、かつ、自分の長所や特技・強みを発揮して学校活性化に貢献しながら、自らの進路実現を図る生徒を求めます。 ・「文武一途」の精神に基づき、学習活動や部活動、生徒会活動等に熱心に取り組み、「知・徳・体」の調和のとれた人材となつて社会貢献を志す生徒を求めます。 ・「創造Originality」「挑戦Great Challenge」「誠実Integrity」の美徳を通して人間性を陶冶し、学習活動や特別活動等に一生懸命取り組んで、自らの進路実現を図ろうとする生徒を求めます。	カリキュラム・ポリシー ・「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点から絶えず授業改善を図ります。 ・大学入試をはじめ、生徒の多様な進路選択に迅速に対応して進路実現を目指します。 ・「オンリーワン」活動を実践し、進路選択をはじめとして将来の人生の指針となるように活用します。 ・次世代の共生社会を担う人材育成のため、高大連携や校外活動等を積極的に展開します。	グラデュエーション・ポリシー ・グローバル（グローバル＆ローカル）に発想し行動できる人間を育成します。 ・新しい価値の創造を通して現代社会を逞しく生き抜き、平和で幸福な社会づくりに貢献できる人間を育成します。 ・健全な自尊心と他者を思いやる心を備え、共生社会を担う人材として人間性豊かな人間を育成します。

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

4 本年度の重点目標	●学習活動や特別活動、探究活動、部活動、生徒会活動、ボランティア活動など、教育活動全体を通して、生徒自身が自分の将来と真剣に向き合い、主体的に考え、進んで行動し、望ましい自己実現ができるようにキャリアデザイン力の育成を図る。 ●社会人としての規範意識を身につけ、周囲に感謝と心遣いのできる人間の育成を目指す。 ●SC、SSWや専門機関等とも連携し、生徒の発達段階に応じた自己理解を深めさせ、学校生活への適応、好ましい人間関係の構築などへの支援を充実させる。
------------	--

重点取組内容・成果指標				最終評価				主な担当者			
(1)共通評価項目											
重点取組											
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価 意見や提言					
●学力の向上	○基礎学力の定着及び進路実現を見据えた学習指導の実施	○各教科の代表者が研究授業を行い、授業改善について研究協議する。 ○教科担当者会議を年2回以上行い、教科間の連携や分析を行う。	・『主体的・対話的で深い学び』の視点に立った指導法を研究し、授業改善に取り組む。 ・模擬試験や定期考査の分析を行い、各教科の課題量や質、学習時間の配分について教科担当者と担任で綿密な情報交換と連携を行う。	A	・全教科で公開研究授業・合評会が行われ、より良い授業を実施していくために研鑽が積まれている。 ・各学年ともに定期的な教科連絡会を行い計画的に生徒の学習支援が行われている。 ・「スタディサプリ」の研修会を行い、各教科利用するとともに、習熟度テストの結果から不得意分野の復習を支持するなど効率的な活用が進んでいる。	A	・子どもたちの進路志望の実現に向けて、様々な取組が実施されている。 ・課題の分量や内容については、生徒の実態に応じたものとなるように引き続き検討をしてほしい。	進路指導主事			
	○キャリア教育の充実及び生徒の進路志望の実現 ○多様な入試の形態に対応した進路指導の充実	○個人面談を年3回以上行い、自らの生き方を考えさせ、興味・関心、能力、適性に基づいて主体的に進路を決定できる能力の育成を図る。 ○進路講演会等を実施し最新の入試情報を得る。 ○生徒が志望する進路を実現する。自分の希望する進路を実現した生徒の割合80%以上になるような進路指導を実践する。	・教職員はキャリア・カウンセリング・マインドとスキルの共有を図り、個人面談等を行う。 ・総合的な探究の時間、キャリア教育講演会等の行事を通して、生徒のキャリアデザイン力の育成を図る。 ・特に学校推薦型選抜、総合型選抜や国立大学の入試動向等についての情報研修会、研究会や講座に参加した職員の割合が30%以上になるようにする。 ・オープンキャンパス、校外体験学習や研修、コンペやワークショップ等へ参加した生徒の割合が50%以上になるよう奨励する。	A	・今年度で、担任・教科担当の先生を中心に面談を行っている。また、先生方は生徒支援のあり方の講習を踏まえ、より一層、密に生徒とのコミュニケーションを取り、生徒の進路相談や支援などを行っている。 ・全教職員、総合的な探究の時間などに関連した講演会に参加をして研修を積むことで、そこで得た知見を生かし進路支援につなげることができた。特に3年生は次の進路先を決定する学年でもあるので、授業に出ていない先生も含めて、学校で進路支援を行う体制ができた。 ・3年生に関しては80人程度の生徒たちが、総合型・学校推薦型入試から臨み、6割程度の生徒が進路を実現した。共通テストも普段より取れた生徒も多く、前・中・後期入試まで受験している、より高い目標を掲げてもうひと頑張りする生徒もいると思うが、ほとんどの生徒が満足する進路を達成できたと感じる。	A	・学期初めの時期を中心に、コース選択をする時期など適切な時期に個人面談が実施されていた。 ・一般選抜に向けた指導とともに、学校推薦型選抜、総合型選抜に向けて丁寧な指導が実施されていた。今後も最新の入試動向を踏まえ、支援体制を充実させてほしい。 ・子どもたちが活躍する未来を見据え、社会の最新動向を踏まえた指導を充実してほしい。	進路指導主事			
	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動の実践	●生徒、職員が人権感覚を身に着けるための研修機会を年2回以上設ける。	・人権学習・進路保障HR活動を全クラスで実施する。 ・人権・同和教育講演会を実施する。	A	・人権学習・進路保障HR活動については、計画通り実施できた。また、来年度の年間計画にも日程の確保ができている。学年進行でテーマを変えながら実施してきた。身近な「人権」について理解を深めるHR活動は、生徒や教職員にも一定の成果があると考ええる。 ・共生社会の実現に向けた本校独自の取り組み「おぎすたいる」を実施している。講演会を含む「おぎすたいる」の取り組みにおいて、生徒の周囲への気づきや気遣いなどに変化がみられる。校外で困っている人への声かけなど、ためらわずに行える生徒も出てきた。	B	・外部講師を招聘して講演会を実施されていた。専門的な活動をされている方の話を聞き、授業だけでは気づきにくいことについて目を向けるきっかけとなっていた。	道徳教育推進教師 人権・同和教育担当者			
	●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめアンケートを実施し、組織的な対応を行う。 ○情報モラル教育に関する講演会を実施し、いじめ防止に努める。	・教育支援部、生徒支援部、学年で情報を共有し、いじめアンケート等について、追跡調査、指導を行う。 ・講演会だけではなく、全校集会、学年集会において、いじめや差別、偏見につながるような行為は許されないことを周知し、道徳心や倫理観の育成に努める。	A	・教育支援部を中心に学年や生徒支援部で連携対応ができている。毎月各学年ごとの情報共有会議が実施されることで、今まで以上に生徒の実態把握を組織的にすることができた。それにより、情報共有を密にして、迅速な対応に努めることができた。情報モラルに関する講演会をリモートで実施し、啓発活動を行うことができた。 ・事業発生時に、初期対応を迅速にし、組織的に対応することができた。	A	・いじめはどの学校でも起こりうるものと考え、早期発見、早期対応のための体制作りが重要で明日、今後も維持、発展に努めていきたい。 ・外部機関(スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールロイヤー等)と積極的に連携して、支援体制の充実に努めてほしい。	(主)生徒指導主事 (副)各学年主任		
	◎自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	○郷土小城や佐賀について学ぶ活動や講演会を実施し、アンケート等で郷土に愛着を持っている生徒80%以上にする。	・SDGs講演会やさがを誇りに思う講演会、小城市出前講座を実施し、地元小城や佐賀の魅力について知見を深め、持続可能なよりよい社会を形成しようとする意識や意欲を醸成する。	A	・郷土小城や佐賀についての講演、県内企業による講演会「SAGASライシルプロジェクト」の実施により、郷土への価値を再確認できた生徒が9割を超えている。 ・持続可能な社会を目指して生徒たちが探究学習を進めている中で、小城市からの協力を得ながら研究、実践することができた。西九州大学では、心理カウンセリング体験や教科「情報」の講義受講、レクリエーション大会参加、プレマ体験講座運営補助など、連携協定を活かした交流ができていた。	A	・「オンリーワン活動」を中心に、「唯一無二の学校づくり」や「佐賀を誇りに思う生徒の育成」の取組が推進されている。県内屈指の充実した活動だと思うので、今後は地域への情報発信に力を入れてほしい。 ・小城市包括連携協定に関する活動に積極的に取り組まれていた。今後も連携活動の機会を増やし、地域とのかわかりを深めて欲しい。	研修主任			
●健康・体づくり	●望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成 ○健康寿命を延ばす食生活を意識し免疫力を高める食事の摂取の推進	●「健康に良い食事をしている」と考える生徒の割合90%以上にする(高2対象) ○毎朝、朝食を自宅ですべてで登校する生徒の割合90%以上にする(高1・2対象)	・生活状況調査、食に関する意識調査を実施する。 ・保健だよりの発行を通して、食や健康管理に関する意識を高める。 ・関係教科との連携を密にするとともに情報共有を行い支援にいかす。 ・保護者への個別の連絡を徹底する。	B	・「健康に良い食事をしている」と考える生徒の割合90%以上にする(高2対象)を目標として取り組んだが結果は88.4%であった。毎朝、朝食を自宅ですべてで登校する生徒の割合90%以上にする(高1・2対象)を目標にしていたが結果は82.5%であった。 ・今後は周知の仕方を含め検討し支援を強化したい。	B	・毎月発行の保健だよりを中心に、啓発活動に取り組まれていた。 ・健康増進とともに食文化の継承という視点での情報発信、生徒支援につながるようなのではないかとと思う。	保健指導主事			
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ○各種休暇を取得しやすい雰囲気を作り、平均年休取得日数14日以上を奨励する。	・定時退勤日、学校閉庁日、部活動休業日を設定する。 ・衛生委員会などで情報を共有し、気になる職員には個別に対応する。 ・早めの個人の業務計画立案を習慣化し、年休が取得しやすい環境作りを行う。 ・チームや組織による業務遂行を定着させ、業務の効率化と勤務の平準化を目指す。	B	・学校閉庁日については計画通り実施できた。部活動休業日については概ね履行できている。定時退勤日については効果が現れていない。 ・年休取得については、年休を取得しやすい雰囲気は定着しており、特に短時間(1～2時間程度)の取得を推進することができた。 ・分掌のグループ化については機能している。今後は学年団においても業務の効率化、平準化を推進したい。	B	・多岐にわたる取組で業務過多になっているのではないかと、生徒の支援を充実させるためには、先生方の心身の健康が必須である。引き続き取組の精選に努めてほしい。	管理職			
●特別支援教育の充実	○インクルーシブ教育の充実 ○チーム支援体制の強化 ○早期発見、早期対応の徹底 ○個に応じた教育の充実	○合理的配慮について必要な生徒及び保護者の理解を100%にする。 ○2次障害を発症する生徒をなくす。 ○支援が必要な生徒は、100%チームで対応する。 ○カウンセリングに対する偏見をなくし、必要な生徒が必要なタイミングでカウンセリングを活用することができる力を養う。	・生徒情報交換会議を、各学年毎に毎月開催し、学年及び生徒支援グループ間の情報共有を密にする。 ・合理的配慮については、入式やPTA総会、その他保護者面談等を利用して情報提供を行うと共に、適切な配慮の実施及び定期的な評価改善を行う。 ・生徒及び保護者との面談、SCの活用のタイミングを逃さず、早期発見、早期対応に繋げる。 ・西九州大学と連携しながら、1年生全員に対して、カウンセリングを体験する機会を作る。	A	・生徒情報交換会議を定期的に開催し、情報交換を行ったが、情報共有にまだ問題が残るので、引き続き対策を考えていく必要がある。 ・配慮や支援についての情報共有を、チーム内でもっと密に共有する必要がある。 ・SC活用については、適切なタイミングで声かけができている。 ・1年生カウンセリング体験については、「SCを利用したくない」と答える生徒が大きく減少し、個々人ごとにカウンセリングを利用することへのハードルが下がったことがアンケート結果から分かった。 ・合理的配慮についての案内を、学校ホームページに掲載し、広く情報提供を行った。	A	・校内教育相談体制が充実し、生徒、保護者が安心して学校生活を送っていることが学校評価アンケートからうかがえる。今後もこの分野の活動が充実していくことを期待している。 ・特性のある子どもや困り感の強い子どもに対する支援が充実している。引き続き取組を進めるとともに、困り感の少ない子どもたちへの支援と合わせて、包括的な取組を期待している。	教育支援部主任			
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目								主な担当者			
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価 意見や提言					
★唯一無二の誇り高き学校づくり	★実践的・体験的な活動の充実と県内外への情報発信	★自分の学校を中学生に勧めることができる生徒の割合70%以上、教職員の割合90%以上	・オンリーワン活動において、社会貢献活動やボランティア活動に参加した生徒が30%以上になるように地域の行事や校外のイベントの情報を生徒に周知し、積極的な参加を促す。	B	・小城市で行われている「江里山なだ那郡」や「竹あかり」の活動には昨年以上に多くの生徒が参加しており、その他のボランティア活動を含めて全校生徒の3割以上の生徒が参加している。社会貢献活動として県内外での研修への参加も見られ、積極的に活動する生徒が増えた。 ・自分の学校を中学生に勧めることができる生徒の割合は70%以上、教職員の割合も90%を超えている。 ・「普通科高校」の魅力の小城市包括連携協定も踏まえて、さらに発信していきたい。	A	・子どもたちは校外体験活動に積極的に参加しており、社会とのかかわりに目を向ける機会となっている。全国高校総体や国民スポーツ大会など、のような大規模な大会で、ボランティア活動に参加できたことは、生徒たちにとって良い経験になったと思う。	研修主任			
○共生社会を担う人材の育成	○共生社会を担う人材育成に関する教育活動の実践	○共生社会とは何かについて、知っていると答える生徒を80%以上にする。 ○共生社会について、深く学ぶ生徒集団を作り、リーダーを育てる。 ○バラスポーツを見る、体験する生徒を90%以上にする。	・バラスポーツに触れる機会を全校生徒に作る。 ・九州大学と連携し、九州大学の講義に参加し、共生社会についての知識を深め、リーダー的役割を果たす生徒を育てる。 ・九州大学ピアアポーターと生徒間で交流し、共生社会についての学びを深め、活動を通して、その理念を全校生徒へ普及させる。	A	・障害者福祉サービス事業所「PiCFA」代表による講演会を開催し、大変好評であった。生徒を中心に、活動を行った。 ・九州大学ピアアポーター学生との交流は、好評であった。また、さがすたいるリポーター活動も好評だった。 ・全校生徒の中に、いじめのない学校作り及び多様性を認め合う雰囲気作りを、もって広めていく必要があるため成果発表会を工夫したい。 ・生徒会を中心に、ポッチャのクラスマッチを開催して好評だった。	A	・クラスマッチでバラスポーツの一つである「ポッチャ」を実施されていた。競技を知るとともに、障害の有無にかかわらず一緒に活動するすばらしさを感じる良い機会となっている。 ・共生社会を担う人材育成について、取組が深化している。今後も取組を発展させるとともに、学校の文化として永続的に定着することを期待している。	教育支援部主任			
●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育 ★…唯一無二の誇り高き学校づくり											
6 総合評価・次年度への展望				・今年度の重点目標については、おおむね達成できた。自己の在り方、生き方について主体的に考える活動であるオンリーワン探究活動をととして、さらにキャリアデザイン力の育成に努めたい。 ・共生社会について学ぶ活動をととして、生徒とともに教師も支援の在り方について考えることにつながっている。今後は、効果的な支援の在り方と業務負担の改善について、および学習指導の在り方について研究を継続する必要がある。 ・様々な教育実践に挑戦しそれぞれ効果が表れているが、今後は包括的に実践を整理し相乗効果を高めていきたい。							